源氏新論考

全

源氏物語新解題考

目録

源氏物語ふるゑ

此ふみを事ゑ人

氏やうゑ

学ばせ

用ゐ

ふるゑばせる

本意

静嘉堂文庫

〇本居翁云。中昔の頃。物語とて。その頃の書ども。物語と公にもてはやされ。多くの書ども。よにおほかりしかど。日本紀の談などのかたにはあらで。字をもて訓むかたの名づけて。作りたる物語の。絵合のおぼえも物語のいできそめたる。およそ今の

源氏物語新釋總考

源氏

國史。および新撰姓氏録などを案るに。嵯峨天皇弘仁五年に皇子信公以下男女八人に。はじめて王号をとゞめ朝臣の姓氏を賜ひて。源氏とし。左京に貫付られしより後。皇子の。王に源姓を賜ふことはつゞけり。源氏ありしより。弦紗のはじめて源氏を賜ひて。にはじめ。三十余人にてはじめて源氏を

たゞかたの妻しらるゝかたは。つゞくこと三十餘人にいたれり。八人まで。

物語がこゝ

我語とは実孫なるべし。此日づくり伊勢へ参る
おとこを法ゆきまた伊勢人のかたらんまま
よ云ふ行てるといつまでもありまば物がたりといふ
るべしとあるべし。後ふるこのことをいつべし。源氏を
六百年ばかりよりも此年号学者説。伊勢物がたり
あるを。実孫のおとくおりへるよりと甚後ちく
く語るべし。もし伊勢物語をとらんとて
語もいづれこの御時とうあけぼと申うあ墨の
終ふいひ法へへる物語のちうと出付ちふ
てうあとうを出てせんもう物がたりうる。

新尺

伊勢行とうつがおちくぶ。甚外物語てい
ふこと清しうつとうを中とひとり業平をの
ぐてい実孫まるを物がたりと申ふと紀を
さとの悔まあ紀貫の用をあるべし。
さとのおうを接て後ふ源氏の
べし。安養寺の考ふ紀ふ物語
ます川昔物がたりとして昔延喜の御紀より
事いの物がたり紀ふ実ふ戒紀のうる時より見ん
字ふとを書ふとして近紀代くの事をるを
て申る物とん西。朱雀院冷泉院ふ紀
いふふ唐詩文注事をりて時を刺

さ紀あるうもく
ちくまし出て
てうの花もいの
御さ紀ふ
後の世ふ
ぬぶ紀ふ
又用しふ
より後の物もを
くして今の世
あるこをとと
ふとのふ業
業物語の煙の
後の業ふ物語
会せて今ふ
うくつくりて

花鳥かうらみて。廿人合せ歌よせさせ給ひていひて。またしかのけふとやつしを見るべきものも物かたり作またもしいさて。むかしくの記れくらりひさ伝。后まうづかりそ。さ僧く書れ句もいづまで安時世えなしもとをか。ならるうつまくかくろいさらか

ことなるが如く記すなり。されど伝ふと定まれるなどの事
なる物ながら。お段続くとして。いつまでもかくさうらば
作者をく業平と伝を見せたる也。伊勢物語の作者は
右大将つね行紀有常が外孫なるをかくし
侍る人は。其ばつ安信時安も其妹子も詞も其人の
実名たがへて出たるとさとれば紀業平をまだ
在五中将といふおとゞを。ひとつふたついへども
めでて書たるが。都で業平の物がたりなる。
さるも。物かきの中実名ハかくれさ補て
かへ哥をとりかへなどせり。此源氏物語のがたりは。

ちやきしるの書面。ざしりけて弥りかへさくるかれたる八。くる名をかくし也。かへもしてかくおる八まきうく作りもし。文すけ作也。あらさるは伝さえ出るもあさくやうくまゝ中さまづつくりたるもの有。さて八つくのなる勢ある物かて行の名をも知るのことは天らき

りの伊勢物語をひろく世のべしかる紙の物也と。
おもゆるおとおもひしかつ人。ふかの業権などたる
かけるに順く其時の人の名を隠さんとするなれども。
めのこよりさる事なる様ハ捨てお段さぶらふ
端ある事なし。縦令当時の人物の人を古人の
名をかりて古今も伝ぶる其人の名を称をいひ
て。ふるき記るがれを源氏の君名は今の二条
賀白殿。伊周公などはいふ子を高明公なる事を取
そくかけるなるべし。
此ふかき事ある人

物がたり八世の中に
名ぐはしう。かゝるよみがた
かきゝ。ものがたり
きゝとめて書き
こと書りに見る
かゝる事ある筆
まどの書物に。其
よみかうじてたての。
さ源氏物語はす。
すぐれたるとして
つゞくなるが。
みなおそろしの。
又八仏のむかし物語
またて物語けり
まはまほしのなき

或説に。紫式部の筆なりといふ事あり。たゞし
うたがはし紫日記にいはく左衛門督 公任 おはしまして。此
わたりにわかむらさきやさぶらふと。うかゞひ給ふ。
源氏にゝるべき人も見えたまはぬに。かの上はいかに。
河海抄には此の上の事を一説にかきつけてよく
筆すれたるは。藤式部を。むらさき式部といひ
かへたるよりて。公任卿もやがて若紫との給ひ
し給ふかと。後人の猜しさる事なり。藤式部といふ事
どもにて。藤の花のゆかりにて。紫式部といふといひ。文
またかの源氏の。女房奉。居文へ中宮のかく仰せらるゝ
中宮の御かたの事など作れとおぼしめせとたまふるよしもある
されば此をまたかるといふも。ある附會と見ゆ。

さめかもじ。去中
此あるやうを心
にても。ものにかへ
をも書るものゝ。
かくて思ふの事
須も男女此るの
らひのまゝをむね。
と思ふ云へるに
よくの事此祭を
よも恋の言の葉
きと同じ事とあり
まで人の情のふ
かくかゝると云
まほさるは恋はれ
なし

更級日記には。むらさきの物語といへるも。此物語の
ことなるべし。さて紫式部と名づくべし。文紫の日記に。源氏
のものがたり人々の御まへの御作文は
藤原長公此ふみどもも。皆式部が作るよし記る
事なり。よりて日記の文をくはしくいへるを
日記にいふ。源氏の物がたり御前にありけるを殿御
覧じて。例のすゞろごとゞもいでける
ついでに。梅のしたにしかれたる紙に下にひろ
たる。歌をかきつけさせ給へる。
さきものと名たかくしたてまつれるひとの

此物語を紫式部が作れるといふハおほかた世の人のいひつたへたる事にて、その日記にもその事見えたり。河海抄なども此物語の作者ハ式部なりと記せり。又宇治大納言物語にも越前守為時が女なりといへり。

まうでたる人ハ行ひしとぞ聞ゆ。（在出云安芸徳）

えせ者なり。

人ハまづ書くべきものの名をおほせ給ひし

ものの名をまうしけむ（式部）

此細きよみたる此物語、御すゝめにて作りたるを御覧じ

て。此書ハ行ひ出る時式部を召したる事也

らるゝあり。

日記に又云　内の上（一條院）の源氏の物語

人によませ給ひつゝきこしめしけるに（一條院の仰を）

ひとハ日本紀をこそよみたるべけれ。

才あるべしとのたまはせけるを（左衛門内侍）ふと推しはかりに、

いみじうなむ才がると殿上にいひちらして。

日本紀のみつぼねとぞつけたりける。

是にて式部が作る證うたがひなし。又此ものがたりハ

先の書に宇治大納言物語に云。

越前守為時が女。源氏ハ作りたる也。出来たる

あとにまいらせたりけるとぞ。后宮

上東門院に宮づかへしける。娘をめしいだして参り

ける此源氏作りて奉りけるに后

まはりたる頃つくりたるとぞいひつたへたる

あべらばかの書にもみえたり。やさしいづまでの

事しるしたるを見て書きり。又河海抄に御堂殿

の奥書をそへられて老比丘ふぢ式部

と申すと見えたるをもて

もろもろの文にいへるのミハ

安藤為章が紫家七論

人の説にもよれり。

しく見わく人なるざましいかう書おきてもを得ぐの説ども皆連どみ事後の人のつくりのでる書をどものきえたぐ此式部紀どもよの所なるいふ家うけがいてかる末の宇治十帖ハ式部が娘の書るといふぞとの説なれども、紛ぶ事をありおなじ人の

あるひと云く

凡文作る人ハ、くさぐさの紀行、物語ともみて、一章書る人ハ一句をかへうる紀所く物紀りのさまぞ若ハ文書ぐくの名の紀らん物どの、大和を求ハ、さる事も傍らめど、かたちて、父が知より出べからねハ、心知りて、全く書の心をみて行べし。文辞も同事うらびすし、甚すハ、始め紀より神の和歌人の後も、学者の書事日記をみ、文人の書なるくるぐ女の用文ととかくまでは作るをする、男これハ雅いろうまじ紀書と称りと為事ぞいひける。

使くかうと、宇多書し、又雲隠巻ハ名のみありて詞なしき故、式部ぐこる見るも宝なるを、今の本にミ書とて別にかりハ後の人のまぎるて見るべきもあらねって書紀ものなり。又山路の露とて夢浮橋の末ふつぎかき物ゆそのほか雲隠といふもの有れど

続くよく心を用ゐる物なりされど、式部が作と定むべし。宇治のものがたりハ人のかくまじきがゆゑなるさればこそ物語のすぢにかる事とかきまじへ紀事多し。世に名高き。

大斎院 村上女十宮 選子内親王 より上東門院へ、つれづれなぐさむべき物がたりやさぶらふと尋ねまゐらせ給ひけるに、何をかまゐらすべきと仰合せられけるに、めづらしき物ハ何か侍るべき、新しく作りてまゐらせたまへかしと申けれバ、作れと仰せられけるをうけ

行ちりて。源氏をつくりけるあうしてくめて
しく作法といふ人作法ばかりなどえづつ人も
せぐ。里どもみよ作りけるまうさう物語つくり
いでたりしよりてやう出されてうまうまうふ
或紀といふ名つけるともいづまう清ちと
まて作りしん。
月記。一とりみよ文ちのまづて事ちうまづ。三ち御
屏風のうちよ事たるまをぶたよまんうれ紙
作りどう。かく用をうつ紀或紀もまれづうの
出まへまありとつへう振まどをまをまづは時彩系

彩尺

出よりて。紀後
より紀ちうち文
たりうの八後世
絵の九の巻より
九ちうちと絵巻ば
ちづの紀後まて。
後と紀前さな
作りしなりは。
文宣孝。良門
の文世の孫まて。
勧修ちの八代
先祖に或紀上
京一位と文徳
うせ一八海に。
鷹司殿の女女

あうべ紀を。右のぶうくちうづ。てづうう他
らんとはもんや。をとひ作ぐとかうとも其紀り
なううべうべ。月記をうく月て或紀づ月りちひ
を紀ちうへ。おのづうう右の説のあ紀をちる
づ。
又或紀。或紀右ふちくありりて。源氏の
第を作て。源廣あ一の巻をせんう紀く。
そ巻より他の巻をう紀ちうく
巻を要し紀作紀あうべし。はそのづうば
の物づうもいひてわうもうさ紀のう人の巻。

本とせる也。須磨明石の巻ばかりまでよりたる
るものもかりそめ。そうかるる事どもあり。文章を
こづくりかねぬ人は何のうまもなき紀中人どもて。
不立ていへるまぐれ。とどめていづまこよるとは
ちがぐ紀事なり。強くいまぐ仮をもちく
ぬぐの所宝とする物紀て。先相夏の巻よりこう
事つくる。文脈も相つがず。宝物なりと見て
さう。且石山ちく法くらの須磨とくる物を
見ずば。皆没世の物なりけりと物ちろそち
人をこれいつまでよりしてどさまうとふそく

といてふやうなる。てんかりやちば。
法華殿の妻と
いふ。みぐるごと
なぐ。さて紫
式部ちよりあり。
式部ちよりあり。
実は名ばかり。
まぐて女房と式
歌お頂て矢右
近ちどいまぐび。
みないを四る呼
名ことを初年
きるくまづつる。
此人実の名毎
こつくりぐ。

て。いづれ人名言
かりり女房堺
ば。実の名ばかり
ど。桜素ぐもあり
よひ名をまりされ
きり。さて式部を
いつく。紫のづふ
式部ちちばかる
式部ぐばかりる
てばぐく四年。
ろちちあんろふ
或ハ左殿ばかりひ
い父まる史ぐど
の宮。母の名ど
ちりまりまりて

あり。さて代抜ぐう落ちるふりみちの巻ぐど
の程ばかる巻ることといへぐ。程よくれん人の
きあるふ相夏の巻よりさぐ紀ちり。はまれ
ぬもいそひハちぐまるを。
又の程ば。法成ち入道家白。奥出をか、
出ちく云代抜ぐう世ち皆式部ば紀ちのこ
ばりへ。是ハ丘巻をくるる所。
此家白道長ち。寛仁二年ち。ム十四ちく入道
しばまひ。法成ちくありて。仏石を彩ひ
きまぬ。入乃ちて是ち巻をくるへたまちん。

よつりてなる清少納言は清原元輔が女の呼名。和泉式部は和泉守道貞が妻なるゆゑ和泉式部といふ。伊勢大輔は伊勢祭主輔親の女也。大弐三位は太宰大弐成章の妻なれば也。紫式部ももとは藤式部といひて

いときびやし。且式部集をしめて。ふづくろやかこり
中ましたる筆を。いかめしきの人。さる筆をかけむ。
妄説なり。式部が中ありより。入道どのゝ御寺より
みちもうけたるに。年へてのち日記あり。さらに
寺ありたりしを。この人ののちに此寺に兵ありて
観音をいつゝけや御家の人とゝもふしなどいひ
侍りし。いつとはなしに観音堂のゆかりの
名へいつゞふかりしゆかり。ねがふことゞもかけまん
よりいゝきうるべしとて。よる是あき。猶あり
なくしぞ。

へ呼しこゑろは。とうさきさをよむべし。紀伝にも。ぞうよでうと読べし。清少納言を。すでの例なりふちあきよみえの志じうなどよむべきよう。男がても江師為大納言中納言などのたぐひ多し。又よりありて文紫式部とも見ゆ。よし河海抄に

氏なり
父は越後守藤原為時なり。為時ハ閑院左大臣冬嗣六男内大臣良門の孫なり。文章生にて越後守に任ず。二所の人ぞ。後拾遺集ニ二所とて父が越後守にてくだりけるをおもひて越後守とかきたる。越後守と侍る歌をさらにすぐれたるべし。其子
田人なり。惟規。惟通。定暹阿闍梨。式部の兄弟なり。
式部の夫ハ右衛門権佐宣孝なり。長保三年
四月廿五日卒せりと大系図に見えたり。
出でつかへたる時
日記云寛弘五年うちのうへ此源氏のものがたり
人によませつゝきこしめしつゝ。なほきこえ

一説に、もとは藤式部といひしを、幽玄ならずとて、藤の花の色のゆかりに紫の字にかへられたるよし。今思ふに此説は紫といふことによりて、其まゝよりて其いへるにいへるものなり。玉鬘をよめるは。なほの幽玄ならざることなりむ。猶よく考べし

又九月。中宮御産のことをかける文に。中宮 廿三歳
是より上 御産のほどのありさまを記してけるまでにて。其
ぐひまでいちじるしくかきしるしたり。一条院廿八年。寛
延二年。永祚一年。正暦五年。長徳四年。長保五年。永
寛弘八年。三条院五年。長和五年。寛仁を過して
考ふべし。

是。式部今になりてのかきすさびなり。

同十二月廿九日の夜に。まゐりしその二十九日に
まゐる。新参のをりのおぼつかなき様を里がちなるに 今
宵の事などかしこし。いまだくもきこゆるものか。それ
しるさずとかいひつゝまつりしかたをこよなくまたこそかたらる

びとなりけるから年中、又清少納言ばの乳母などいふ紫式部といふ事は二説あり。一には此物語を書く紫の上を作りし事を源氏物に此局をかへり。一には一条院の御乳母の子也。あつかりて上東門院に奉りしなれども、ゆかりゆゑの色なれば

もっと深し此頃のおぼつかなきことに
同六年日記に書きしるしの夜かくよるところ。
年くし八。寛弘四年にあたる日一文字にて楽府を
復六年めなり今年八八年にあたる。
いまはさまできこえけるまで書へしておぼせ給ふ
もかくし給り。

右の條々を考ふるに。式部が夫宣孝は長保
三年四月に卒す。其年式部宣孝寛仁元年 寛仁
二年三年四年の夏のころより楽府をひく
書けども又其年九月に至つてかくなりしかるを
しかるに長保三年四月 辛丑 より四年ばかり

やうもあらく居て。寛弘二年十二月廿九日に出て
住へ下る。有よりやうやうあどこのつまづくをみる
うちに書キをも出仕して湖に白氏文集
あどをしへ奇ぐしてみすの書をも
つくり。ありたるあるべし。れはあるこのまきく。
一巻をうちかはむずいと容易くかたがたべし
いとをいうくも。俗にんに数を強べし。
大神宮の御ものいたるまでいとはなど
をもつれまへ後ぬ。若又ものぐるひ
言中のまををらしくいうでもあるをもりし

部史

おがしのせよや
きしかなりしよ。
ひあるう。武蔵
地の義とあり
此二つのうち法
ぬるを家の流を
もうひもて河
あるも一紀のう
ち。紫上のうを
をくれくらはみ
しる物と。後武
紀を改めて紫
武紀とせれ
ものというりいう
物つく紫上の

のうををくれく
かけ物ちふを
きををべしうう
紫をを作をを
英源をる物ふ
ををいうで
ウの紫をのを
物をすを源かう
てをうむをて
清乳母のをう
しをて一陳のを
うぬのをぬうう
のをををうう
をひ。をををを
もをををべを

人も作をんう。筆本の事を。公私の事をも
文のいひ合せ。又をををも才のをる人ハ学をの。
知のづをを知をを。をををを作をを。ををく
見れををまわをを。をををも知べ紀を。況や学あるを
人のつをを。おのづ学をおをを文の下代
改をを。かをを紀上一人の四事をも。居ををを
うへをも。考ををを作をを。あを人をををを。又
おのづをを見をををあをををん。

学のをを
日紀を。をのをを武紀を。をを人のをを。

て史記といふ文よく侍り。時宜をひつて。
かのひとはかうくとうわとるる雪文をも。
あやしきまでぞさとく侍りしを。文を
ものいまとてはやはりまことうをのこころく
りつぬまうを。幸ありけまてて。たとり
なげうをいと侍を。
又云。さるあやしう武がさとの学窓のまこと
けつる。費用を。筆はまて。和歌。ちくべ
あぐる。ものを入て面のある日。琴柱をも
なぐもいひ侍ぬまこと。ちるとつりうく。

むさしの国ハ
みちのくにハ
そこなるいとの
あのことくてそれ
より世をゆりと
いひ侍ハせう紫
式部日記に。尤
面白き物ハ松ある
うことはてすと
ろくはなきなり
あるゆとうが
ひのゝ源氏ハ
ものべき人見ぬ
いぬこのうへ人に
上樂まいていで

よ世をまてはるこ。ゆ。こ柱のまぐ侍ようびさし
入川。びいはもぐるまをまて侍る。春さ彩
げ。一ようひとひ。ひとひ。ものまぐ。ものえ。いまび出の
ひとひ。ものまぐ。ものえ。いまび出の
まを義をまを。川うくまひちまびあけてう
人も侍ぬ。ものとかうつうを文ぐるまぐこと亟
かさ彩。宣孝年後
人も出ぬ。ものを歳。後。を物ろく
いうまりあ。ものをつまぐくせあく
侍。女房。一巻 二巻 舟。ひとつふつ。ものを川いでて見侍る
侍。女房。集りて。おまへハかくおとをとゝ。ハ清

さいたるあきなり。あでう女ゐんなる文を
よむ。かうしは紙よむまで。人は制し
ねと。ものうごちつゝまゝ作るもいと
又云文の師まくく文集の文ら清せ
ものまで。さて作るのものとものもせ
まりげに。紫いうしうぶいとものぐく。
人はきつゝ相はくくをしの
文ごゝろより。樂府とつの文二巻をぬぎ
ものけあくまくゝ写えをせて作るもかく
し作り。

物語紙は
はあつ。
此日記の文つ
けてもゆゝ紙。
まゝうて紙ゆゝ
しこゝ紙ゆゝ
紙よゝ時は
紙とつ名の
紫上はつゝ
ぬとゝ紙をゝ
とゝ人の法
へゝ紙をゝ
ゝ紙をゝ
ゝ紙をゝ
ゝ紙をゝ

いつをゝ奥六
ものゝ紙も紫
上の日記をゝ
てゝ名ゝ
の名ゝ
ゝ名ゝ
紫とのゝ
なゝ紙ゝ
ゝ紙ゝ

此物語。いつなる
よりて作り
といつゝ
ありがゝ
上東門院さま

かく世ばくくあるべ。和歌の学ゝ
あゝも上手あゝ年。或女房のあゝひゝ
行ゝゝ。

用意

日記云。ゝゝ人をゝぶくかゝやゝく。
あゝゝを用ひんゝかゝゝ
却りゝぶ。先わゝゝ人をあゝ
毒をゝしゝゝ。仏はきハのゝゝ
えあゝいゝ
又云やゝもせばあゝゝのゝぬゝ

ら西附大安院
よりめぐらす
如法やとのゝ
まをかくるをる。
俗ほとけをかくと
又流るどうけ
ぐるまのかの七
宿まもくちく
ちるをくらぐ
ぜ。又西宮殿
よりをさる紀き
あれ貴かるこ
つ天時代ぶ
つぶ大石山ま
をもりてかけと

かるてる歌をよるいでゐもつるあう
ぢみあるくてもぢるきこ〜ちる芋もひる。
人ふくてもつとりくるおがしきぢるわさ
あり。
又ふ。よんばつをぐくある人のまぢるき事
あれまくるをたれ人ぶ引さぢ。おるひ
ぐちく。佛を修りるる女 ちちぢでらうぢぢ也を
うるたあど。いるんづをあくるんゆるるぎれり
と或ア とひまくくんるまをせつぢたおをを
さへ。ぢの川うつひとあるるをかるあるる

とのひ大般若経
の料家のかけを
ぢ。妄
説多。初の一清
寺といふ世と
紀をる紀をよう紀
なる数よつて
いるをべし。
又ふ石山まあ
もれるをるも八
月十五夜の月。
湖をうつて
のををるるを
まくるぬぐるの
風情のかよう

ぢもむ。おし
はしれるるも
うまぢ紀人ぢいひてやくあれなるぐし。
物ぢ紀ちち。我ぢと背人る人のまく
まてぶ。うるぢ事ぢ物いるるもこのうく
ぢる。おるくいるも物のるくぬる人
ハかるし。ぢるるぢ紀ぢてをるるをを
ちくて。人をぶあるるるあれあるを。うを
ゆるるれるぢ面ぢをぢるみをど
えるるびぢ。ぢるひまぢるるるるぢる

なり。ちかくさんどうもてきたりぬ。ぐうしたまへ
ばかりぞ。むつうとおもひてゐけるまでに人は
いとゞありたてまつりたまへるを。はやくかうをはせ
さうぞ。武蔵つぼねさるべき人の推量をいとゝ
人をあくげうぐしたまへり。
和語あのうつくしきうつくしきを人をも
はりそば。後ぜんぜんとさんはとさん。
うふ人くいひはりひつくにたるをたること
武蔵つぼねあやしたまへるとあるとを
あんはぬのゆるとそれいひはりたまへ

とかりたまへり。正
月のまつりは又か
はりたまへり。
ともをこかきと
なる。又今石山
ちる。源氏間と
いふ。武蔵つぼ
像をさうの硯
机をとりてゐる
ゑかの硯
よりて事ぬし
りのくにたまへる
なり。又源氏物
在西の大臣は
なりたまへり。

かしく人くのうおいそけりのとん物
きれとけるとは物はなどきで見ず
吾心とるるひりてる侍るりさ侍
又云。女のおもてもてちとけて
じとなん人ひとうど人をけ。物
まじう成ることのてふきる物く
侍りて。せくしくやさしきたちぐき
をる人はもうどあきそれて侍
又云。さ侍ようとぐで人をおいてる。
仏物をてのどやうとおちめぬをとく

さるあとの作をも紫上も式部に
づくらせてまく
うまりなどりては
いとをさしいぞ
さるまかける紀
ことなれば あそひ
よくもし。
此物語寛弘の
ながめいでて。
康和の末の流
布なと河海の
至る物語
ふよりて今
武部日記まで

しておすゞゆゑもよしもあしくうしろ
やさし事なし。
又云 年ごろてゝざえがまぬるぬくならべハに
ずやるなやうなくすのくら侍るゆゑに よ心に。
やうく人のいつも写ゆめてのち。一と
いふ文字をだにきしりしきなかりしど。ひと手
侍く出ましく侍りよろしくあきことにひ。
けん物。めくもとくめにし成くく侍りしなり。
あるひ内侍の
いよくかくるかうにつたくしくいのくく人を
侍くきゝてふくもかくにとそべにつくしさま御

新尺

考ふるに寛弘
の始めをへてく
とにみえし也
べし書きはず。
なれ十帖の成
るを考へて出来
たるにや中も長
保の末寛弘の
始めるべしさい
つり読みし哉人
栄花にのぶる
らくのまうれ
書よう読むる
源氏もかくや
きんと見なると

御ぞぶりのまさに手だにまちまだよまね
かくし侍りし。
又云 あしたがすゑに しもかくゝて引入
まんたがくしてかくん。又あぞてひてゝけて
さまよひさしきくだよるなれく
の心さゝりしあるがなくる用ひんあつと
のいとうゆるしあるべし。
是を式部があくる物をてあり。よのかくの。
道長公此物語をよびはいゆくひのぞき。
まさ文人のかしらぞの後あだ白紀のやうを。

いろハ長德二年
四月比のうちにをわり
かけはいりさしおき
まやく此物語ハ。
世に流布せりと
見ゆ。寛弘の始
よ此物語もてはやされ。
記がありとありと
めるハなかくよ
たるを栄華物語
かりの紙にかゞ表
德二年かるは
こゝをさしはやめ。
うは栄花ハ寛
弘より後の事

抽讀は今くみるべし。
○又物語は紫の上のうつくしく艶なる
うへ也を紀物語り紛りかく用意深く。
あらしの上の色すゝめのこゝろよく道理
くばり花散里の心しづまる物語は
せられさまざま。紫上の色あつかひのむつまじき。
朝顔の斎院の操つく名を惜しみたる
うつくしくれ人への懇想をさるよくいひ
のがれ。総角の君の文字の遠きを守り。
玉鬘はしかく見をさめなし末摘花の

新尺

つまバ本でふるとき
うかゞむさそ康
和乃此書流布
まとめられぬく。
日記の幽も紀。
式部かゝりつゞ
へして左し。猶
まめく文のうち
すいし設なまる
さ隨ふかくし。
まめ文辞よ幽
よりてかうかせ
其後於て宮家
つのうちもりし。
とくる統もいう

さまざまのおもむきのかはる心あさく思ひとるぐ
して積みかさねたる綺語をあらし。
もやく不定なるを紀すはめるをさまざまとゞむ
あるをかはずて。そのおよび行事かくし記
宰相は其容をかうくとすくなく
人をいやしみ世人へど實は武部がまるを
あらしたまひしかのおもむきて一部をはるには。
まづ文華逸興なりて論せんと緒をとて
○心をあぐさむるなすべし。源氏が物をとり
まうかくしかくのへずさき傳佛のうちまで

がありこハ後京
極六百番歌
合の判の詞又
定家卿の賞美
のおばなどの
からきもひ給の
ゆゑあるなり
しかりとしるさ
とあるべし
此物語作者よ
准據とあること
なりだとへバ光
源氏をつくりし
まけ給ひし西宮
大臣高明をなずらふ公

りつらう引ていふ人も侍れども。さらにまたく
よこなりおのづからいづれのうちにも其人の
ありしまことに、かくすぐれたる多くのことにも
からうまなりなづらべしと。

文のさま

物がたりを作りまくてまだにまれぬさまに
よりもよろしき事よりも文は後者とかきおほを
後ふもあけるかは詞物もなきいせら川など
物かたりあるの物語よ。からずとかくおほきを
かんがへもあるの事とかまへ皆あるまセ侍く

らんてまでりけ
いかさらひしさかに
物がたりよ安から
人にかるがよ皆
おもくくなずらへ
て。かてるあるも
かるハかくれ
大かるハつくる
ある中よいさく
くゆるをよ是
正としてそのさ
侍るへあらして
佗なることあて
文かきし人
生一人よりてさ

まくらこともさる事なれど。見るにいとくだ
ものしふつくまなくこうかりにおゐてあるべき文
くも侍るを物がたり見翔の事などすらへる
物かりさまハ序跋記傳書等の法ならず
なほ波瀾頓挫照應伏案等の文の法を
かへる側叢蘭句繁文簡易。からひゆ變へ
いひくるよひとつくの氣くなし。あるハ亜
是皇子史賦の詞からひとて后宮大中下の
局下女。或ハ儒。或ハ僧。或ハ都鄙山林
市朝をあげうのうちなべて温厚和平

他はまたもとの氏族一ところのうへの人をもとへの人をもとのうへの人をもやはりもとのうへの人をもつぎてもつぎてもつぎて

本意

かもやうもかしこき上一人神の御子孫
として。凡下共もうるべきことにはあらで。叡慮
といへども。おのづから世の中のうれしさ
じゝ給ふなれ。御ものうい人はものうきをも
くみ給ふしめすまことの御心ばへ更
衣のまゐりたまへる時。百民ものくるしむ事
おもひ。そもはかなき更衣の命をもあひ
給へる御心ばへ。又後世と源

氏

氏物語の作者紫式部は、源氏六十帖をかいて、そこに世に
出た六十巻の物語を撰ぶ。此物語は、
又十巻にまとめられ、六十帖ばかりなる
きぬかの天台の
ものもいて今
せんとてさいひ
なせるこゝろは
六十帖ばかりあるべし
も。天台の学

氏もおもひつゝけて、物がたりを書。源氏六十帖をかいて、そこに世に出た六十巻の物語を撰ぶ。此物語は、又十巻にまとめられ、六十帖ばかりなる きぬかの天台の ものもいて今 せんとてさいひ なせるこゝろは 六十帖ばかりあるべし も。天台の学

別あるべきことにあらず。終に意情のもしを野。
こゝろの外の中にて、そこしかるべき思ふ所
ものがたり出来る。御身はものゝ哀も
そなはるべきことにあらず。況やうきこゝろ
の中にあるべき人はものゝあはれをしらぬも
のの多きなり。いまだ若くして此の
やうにおりたる。人心のわざとはかりがたし
たゞ物がたりの作者にも人をまどはす
丁寧なる。人のいまだ世の心を

多いと雖ども、
文芸この道、
史紀の本紀世
家列伝よりは
まことのみちにはさ
らぬことをとゝのへ
てさかうれば、
後よりてそのへ
ざ、作ることも
なくてこゝろもと
りの事をぞ、こゝ
おのづからみそう
なりとうれしかゝ
ぶるまれよよ
かりまとつかと

うゝ〜辛くうれ物す。辛ぐ世ふるよくこゝろを
いへり。又源氏の妻をこく、冷泉院の生き
辛くもひ。ちうも源氏うしろ〜ちまよ。美
仏君薫系氏ともいかぐ。皇れ清つ絵絞
めぐし。ちばくく其まぐまさ人歯をこゝ
ちばくまうへぐも少くも皇子皇女をとり合
せて。かゝるふもも他姓をせぐこゝを志うあぐら
仏ちひ。けるものあるさて。絵と朱雀の称
系うもかへし。まるたゝ和文の風刺こゝを
女性をこてあぐこうなる物うう。世をを

新史

ぢ、大きこけるこ
らねちとるもう、
上件のちぐも
まきべて安居
翁の説をあく
かと考て世戸
かく頭をよ元
くまくりのつ

よくかうがへむ人〜。史をふるもとべき物うう。
見りとる文中の本紀て平ぐし。かゝとど人情を
よくちろしあるさな西条ぐまあり。ちの
平安ひと平ぐ見うちあるべくそ。いうくうは
ちくこの部ぐ世紀けぐこむや。けりう居ちる玉
つとてもあぐこくて家くの仏本紀て。人これ
用ことあるくし。あい。源氏の嫌とあまを
とくふくむ人も作まどさしもけぐ人情の
引とちろ山志。毛見ることうちまどしてよく
見れぐ。其つよし。自然とかうちちれく

男女は男こそ多かるべき事なれ。日本の作者
ろ[illegible]りのを以て、風流をとるべき日本紀を
よろこぶやとて作らるべきゆゑなり。人
し紀事をつゞいてつくりあらばいとゞ
代をとりて是を見んひとはいとゞやかつ
おのいへる事ども。荷田東方翁 安
養寺章ゞ論をかゝるべきなどもおのゞ
おりおのゝ人も作るべきかなてのこゝろよ
らむ。おのゝこのをぢのこゝろをもてぞ
をしるべきものなり。うは書きあるおの

ぞうりいくる事をなり作べし。

加茂翁源氏物語新釋拾考一卷稿本稲葉ゟ
借くるに本を文字に写すこと[illegible]
うに清書せり。文化十三年春正月

浪華　石津亮澄

源氏物語新釋拾考手

本居大人校正
神代紀葦芽
全部六冊
新板出来
此書八遠州土萬侶先生著述ニシテ加茂真淵
本居宣長両師ノ正説ニモトヅキ古ノ訓点
ニ復シ古義ヲサトサレシ書ニテ古学ニ基
アル書ナリ

紫文叢錦　源氏ものがたりの中よりめでたきを文を
ぬきいでて文章をかくたよりとす　全部八冊
紫文清意　おなじものがたりの中の清意文を抜出て
雅文の清意をかくたよりとす　全　一冊
紫文要語　おなじものがたりのかなづかひをいろはにて
かなづかひを委しく注釈をくわへ　全部二冊
掌中源氏抄　おなじものがたりの巻々の名をあつめて
ものがたり第五巻目録をもくわへ　全　一冊
清意文標　雅文の清意文の句どりを俗文の句
あつめてかさねかさねを委しくものがたる　全　一冊
万葉類聚抄　万葉集の短歌を四季部類に
分類し名歌をもくわへ　全部二冊
歌文用例　近世よりはじめたる詞をあつめ
てよみ方の内ぶりを委しくものがたる　全部二冊

文化十三丙子歳十二月

書林　京都　額田正三郎
江戸　須原茂兵衛
大坂　同　鹽屋喜助
同　河内屋儀助
同　奈良屋長兵衛
彩尺